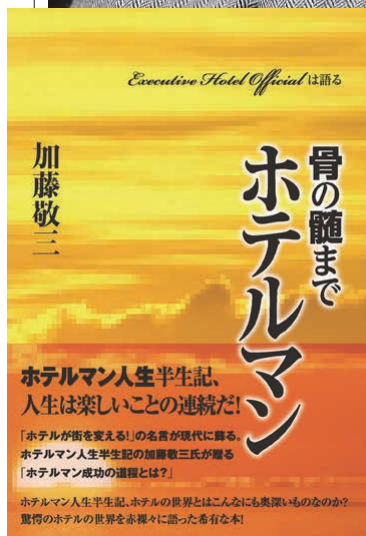


『骨の髄までホテルマン』 加藤敬三のホテルマン人生とは 走り抜いたホテルマン人生の軌跡



日本のホテル業界は、戦前・戦後でその趣を異にする。戦前には東京など大都市にホテルが創業、その利用は外国人が多くを占め、日本人の利用は貴族や政治家など限られたものであった。戦後、この流れが大きく変化しハイゼースホテルと呼ばれる一部のホテルの営業再開から、最初のホテルブームとなった1964（昭和39）年、東京オリンピック開催時期へとつながっていく。この時期、コンチネンタル、そしてフェザーモントホテルという英国調の雰囲気漂わせる独特のホテルからホテルマン生活をスタートさせた加藤敬三。その後、大阪ホテルプラザを経て、ホリデイ・イン南海での総支配人時代まで、まるで疾走するオオカミの如くホテルマン人生を謳歌する。自らの著書『骨の髄までホテルマン』の秘められたエピソードを交え、加藤敬三と縁のあった人々の哀悼である。



不良だけど品がある。酸いも甘いもかみ分けた 「骨の灰までホテルマン」の肖像

跡見学園女子大学観光コミュニティ学部 教授 松坂 健氏
(オフィス アト・ランダム / atrandom@pop12.odn.ne.jp)

村上 実さんから携帯電話で加藤敬三さんの訃報を聞いて、最初に湧いた感情は「しまった!」という自責の念だった。悲しいとかしみじみというものではなく、約束を果たせなかったことへの自責の念だった。

結局、加藤さんと最後に会えたのは、2015年の春だったろうか。オータパブリケーションズさんがやってくださった新版『骨の髄までホテルマン』の出版パーティー(ホテルニューオータニ)で元気な姿に接したとき、「もう一冊、健さんとやりたいな」と言って肩をたたかれたのだった。敬三さんはいつも僕のことには健さん、健さんで、そう呼びかけられると、なんだかこちらが無性にうれしくなる、そんな感じがあった。

結局、それから半年後くらいだったか、どんな本にしようかあいさつ代わりの打ち合わせと称して、芦屋の彼のご自宅を訪問したのが最後だった。

僕が月刊ホテル旅館誌の編集人をつとめていた1986年3月号から3年間にわたって、加藤さんのホテルについての知識、経験を引き出そうと連載記事をまとめていた。それが後にまとめられて、旧版の『骨の髄までホテルマン』(1991年9月刊)になった。

この記事は基本的に録音し、僕自身が原稿として再構成した。話があちこちに飛ぶ加藤さんの座談スタイルを首尾の整った一文にするには、それなりの腕力が必要だったが、毎回のこの仕事は楽しかった。

連載にあたって筆名をどうしようかと、なった。僕は編集者としては基本的に筆名反対派でできれば本名で勝負しろ!派なのだが、このときの加藤さんはホリデイ・イン南海の総支配人といっても、より大きな組織の一員ではあったし、無用な摩擦は避けようということだったのだ。で、どうすると考えていたところ、ある食事の席で、昔の歌謡曲の話題になって、城卓也の「骨まで愛し

て」っていいよね、なんてのどかな話になった(古い話ですみませんね)、そのとき、あの歌を英語に直すと「ラブ・ミー・トゥ・ザ・ボーンズ」とでもなりますかね、と半畳をいれたところで、加藤さんがはたと手を打って、「骨の髄っていいよなあ」となって『骨の髄までホテルマン』という連載タイトルが決まった。ホテルマン・トゥ・ザ・ボーンズだ。

ペンネームはホリデイ・インにちなんで、最初は堀出院を姓、ホテルの住所が大阪ミナミ、久左衛門町にあったから、堀出院久左衛門にしようというのが最初。でもまあ、これじゃ江戸時代じゃあるまいし、ということで少しホリデイの発音をなまらせて堀田(ホリタと読ませるが実際はホリデンのつもり)、インには「胤」の字を当てて、まもると読ませるふうにした。これが堀田胤の由来だった。

都合3年間、大阪に毎月通ってまとめたこの仕事は加藤さんにとっても、僕にとっても楽しく、ホテル業が若々しく勢いが本当にあった時代の息吹を感じさせるものだった。

人生の終わりを予感したのか、その後のホテルについての考え方をまとめたものを加えた新版『骨の髄までホテルマン』が上梓されたのは、まこと素晴らしいことだったと思う。

そんなある種の濃密な時間を一緒に過ごしたから、加藤さんはどうも僕のことを弟分のように思っていてくれたらしい。大学の後輩というつながりもあっただろう。今なら話せるけど、ブランド物のスーツなど仕立ててくれたこともあるほどだった(「健さん、ダブルの上下くらい持ってなきゃ」)。

そんな加藤さんからの「もう一冊」である。断わることなどできるわけもなく、何か考えますと言ったけれど、正直、オータ版『骨の髄』は本当によくできた本なので(もっともっと売れてほしい、みんなに読んでもらいたい!)、これから

先に何かを考えるというのは、かなり難しいことだった。

結局一年以上、たなざらしのまま過ぎてしまう。年賀状に「今、しばし」と書いていたのだが、そうかこの手があった、と思いついたのがこの2月の頭。

それまで、新しい本でも加藤敬三という人がいる「風景」をテーマにするのが当然と思い込んでいた。でも、それだと彼が画面の中央にいて意見を述べている風景は新版の『骨の髄』で相当、究められてしまっていて、正直、これ以上付け加えられるものはないな、と感じてしまったのだ。

それが、あるとき、そうじゃないんだ、彼が「いる」風景ではなく、彼が「見た」風景のことを書き残せばいいんだ、と気づいた。

彼が若いころ、見たであろう東京や大阪の風景。昭和20年代から40年代のホテルを中心とした「眺め」。これらを忠実に調べ、僕も資料や写真、彼の仲間からの証言などで、彼と同じものを見ようとする。その結果、加藤さんの風貌や考え方、生き方の哲学などが浮かび上がる。そういうふうになれば、やれそうだ! と思った。この手法は実は司馬遼太郎が『空海の風景』で展開したものの応用なのだが。

加藤さんの履歴は多彩だ。戦後すぐのコンチネンタル、フェアモント、プラザ、ホリデイ・イン南海大阪とそれぞれの時代の最先端に行くホテルを経験している。その記憶の再確認を加藤さんと共同作業でやろう、と。

だから、村上さんの電話で、思わずしまった、と思ったのである。

加藤さんは僕が会っているときは終始、上機嫌だった。あまりいらいらしたり、落ち込んだりしているふうを見せることはなかった。案外、人見知りするところがあったと思うけど、一度胸襟を開くと、無限抱擁的なもてなしをしてくれるタイプだった。こういう包容力を

持つGM（総支配人）さんというのは、1970年代。80年代を過ぎると急速に絶滅危惧種になっていった。

ダンディでダンヒルがお気に入り。持ち物も一級品を身につけていらした。ユーモアがあって、少々茶目、不良中年、不良老人がぴったりだった。

ホテルマンの死は、彼らの見てきた「風景」も一緒に死ぬということだ。だから

こそ、あと1年、いや2年？ 加藤さんとその仲間の方々に取材をつづけ、彼の見てきたホテルの風景を紙の上に残したかった。

でもまあ、人を許すことにかけては、優しいお人柄だった。間に合わなかった僕にも「いいよ、健さん、またやればいいじゃない」と今でもささやき続けてくれているような気がする。加藤さん

はきっと「骨の灰までホテルマン」なのだから。

こういう人には贈る最後の言葉はやっぱりこれしかないよ。チャンドラーのフィリップ・マーロウのセリフだが、「さよならを言うのは、ちょっとの間、死ぬことだ」

訃報を聞いてから、僕は何回か死んでいる。

骨の髄までオチャメでおしゃれ、グルメな Mr. Kelephant

加藤敬三 助手 しまかた さちこ氏

[骨の髄までホテルマン特設サイト](#) 🔍 検索

5日前に88歳、米寿の誕生日を迎えただけだった。

「ニラレバとビーフン。全部食べられないから保存容器も買ってきて」と頼まれ、病院に届け、おおむね執筆を完了した原稿をどうするか算段した。病室にパソコンを持ち込み、その日もベッドに寝転がって、スマホを操作し、ピンクのBluetoothのワイヤレスイヤホンでYouTubeを視聴していた。最新、最高の機器を使うのが好きだった。

そして、その翌日、「最終章 骨の髄まで悪性リンパ腫」を発刊しないまま、2020年の東京オリンピック開催後のホテルの動向を案じながら、Mr. Kelephant 加藤敬三先生は逝ってしまった。突然。だが、長い闘病生活においては「身を切らせて骨を断つ」という信条どおり、最後の最期まで闘い、潔く散った。

Mr. Kelephantと知り合い、仕事を手伝い始めて23年。私はコンサルタントや大学院の講師としてのMr. Kelephantしか知らないが、本当にいろいろなことを教えていただいた。ホテルや観光のことはもちろん、おいしいもの、料理のしかた、仕事で一緒に東京や鹿児島への道中はクルマの運転の仕方まで教わった。

ホテルに初めてパックやプランを導入したのも、UG会を創ったのもMr. Kelephantだと聞いている。今日のホテル業界の礎を築いた一人、と私は承知している。

「マルチタスクやレベニューマネジメントなど、横文字にすれば格好良く、新しいことのように思うが、そんなものは昭和の昔からやっていたことだ」と、晩年、Mr. Kelephantはよく口にした。先輩たち

の知慮の上に、私たち、後に続く者の考えが生かされているのだ、と教えられた。

また、こうも言われた。「歴史や昔の人の言動を評価するならば、その時代に立ち返って、そのときの目線で判断しなければダメだ」と。時代が変わっても、最先端の技術やAIが登場しても、物事の本質、真髄をしっかりと見極め、深いところまで掘り下げて考えなければ間違う、ということを私は学んだ。

Hi! Mr.Kelephant, 鹿児島は池田湖のオオウナギ。それを管理されている方に「これで何人前の鰻重ができる?」とお聞きになったこと覚えていますか。そして、それが指宿市指定の天然記念物だったということもご存じでしたか。あとのことは後続の私たちに任せて、そちらで、たっぷりおいしいものを召し上がり、ゆっくりお休みください。Satti

※ KelephantとはK + Elephant (ゾウ) =敬三



2015年4月10日・東京「加藤敬三氏を囲む会」



2015年7月11日・大阪「加藤敬三氏を囲む会」

忘れえぬホテルマン、加藤敬三氏

～ホテルを愛し続けた^{けた}桁違いの人生とは～

(株)オータパブリケーションズ 経営調査室室長・専務取締役 村上 実

2013年11月、当時、虎の門にあったオフィスにアポイントメントなしで初老と思しき人物が訪ねてきた。「昔、ホリデイ・イン南海に居た加藤です」と受け付けた女性スタッフが、不安な表情で筆者に取り次いでくれた。それが加藤敬三との10数年ぶりの邂逅^{かいこう}であった。

久しぶりに膝を突き合わせた。それこそ40年前のフェヤーマントホテル時代から、大阪の名門ホテルプラザでの当時の鈴木 剛社長とのエピソードなど、枚挙にいとまがないほど次から次へと話題が転じていく。長いホテルマン生活の^{とうび}掉尾を飾ったのがホリデイ・イン南海の社長というキャリア。そこで話題を集めたのが自身初の著書となった『骨の髄までホテルマン』の刊行。当日、大阪では、ホテル関係者が「ミナミを激変させたホテルマン」と激賞したという。この本は、柴田書店から1991年に刊行され

ている。加藤は身を乗り出して言葉を重ねる。「この本をもう一度書き直して出版したい」と。あっという間に出版の話はまとまり、そこから怒涛^{どとう}の2年の歳月が過ぎていく。小社の担当である森下からは定期的に進捗状況が報告されており、何度かは加藤が当時定宿にしていたホテルニューオータニ東京の中国料理「大観苑」で打ち合わせが行なわれた。

結局、この話がスタートしてから2年後に改訂版『骨の髄までホテルマン』が刊行、東京、大阪で加藤と縁のある友人・知人を招いての出版記念パーティーが開催された。昔からダンディないでたちには定評があったが、その趣は歳を重ねても何ら変わることはない。

いま、加藤との邂逅以降の何回かの打ち合わせの中で、神戸に招かれたときのことが脳裏に浮かんだ。それは何回目かの校正のあとの、いよいよ下版

するタイミングでの打ち合わせで、住まいの神戸・芦屋からも近い新神戸駅そばのホテルであった。

「この度は、本当によく決断をいただいたことに感謝しています。やはり、御社とのお付き合いも先代の太田土之助からですからね。いま、現役のホテルマンの方々に、往時のホテル業界がどのような様子であったかを伝えることが、やはり私の義務であるという認識で、無理を承知でお願いしているわけです。少しでも、私の描いたホテルという世界の素晴らしさ楽しさをご理解いただければ、これに勝る幸せはありません」

恐らく、永くホテリエを経験された方々は、それぞれに一冊の本が書けるほどのエピソードがあるはずである。そんなホテルマンの象徴として加藤敬三をこれからも長く記憶に残したい。

JR「芦屋」駅に降り立ったとき、小さな雪が桜吹雪のように舞っていた。2018年2月12日。坂の上に在る病院に向かう中、もっとあたたかい季節に、なぜもっと早くに訪れなかったのだろうと後悔の念が募った。

2015年3月10日。オータパブリケーションズ刊の『骨の髄までホテルマン』は難産の末、この世に誕生した。これまでも、弊誌『週刊HOTERES』の連載から書籍化への編集にかかわったことはあったが、同書のように、自分史でもありホテル業界史とも言える超大作の寄稿原稿を、既定のページ数に構成・編集という至難の業に取り掛かることは不安の一言でしかなかった。だが、ここは業務命令と腹をくくり取り掛かったのも束の間、生原稿を読み進めていくうちにその時代を垣間見ているかのような錯覚と、加藤敬三氏の

ホテルマンストーリーに引き込まれていったのを今でも覚えている。当初250ページを想定して始めた編纂作業だったが、豊富すぎるエピソードの取捨選択にかなりの時間を要した。何度も何度も編纂し直し、新原稿と差し替え、イラストの変更…などが繰り返される日々。ときに強く言い返し、謝罪し…いよいよ発行できないのではないかという危機に瀕しながらも結局、464ページという四六判の書籍としてはかなりの超大作に仕上がった。

発行後、4月10日には東京で、7月11日には大阪で、大勢のホテル・レストラン関係の重鎮たちに囲まれながら「出版記念パーティー」が行なわれた。駆け付けた往年の知人らとの熱い再会を目の当たりにし、制作期間の1年間は85歳の加藤氏にとってはわずかな時間だと、気づかされ少し寂しく感じたものだ。翌年以降、

2月24日の加藤敬三氏の誕生日には、同氏が好きで集めていた「ゾウ」のグッズとパスデーカードを贈り、ときどきメールを送り合うようになった。発行から丸2年となる2017年春ごろ、助手のしまかた氏から第2弾の執筆状況を知り、年内には…と思いつつも再会がままならず、やっと実現したのが今年の2月だった。加藤敬三氏の米寿(88歳)の前祝いとして伺えたこと、そこで第2弾『骨の髄まで悪性リンパ腫』の生原稿を読ませていただいたこと。何よりも、病院内のカフェでおいしそうにチョコレートアイスを召し上がっていた姿を想うと、とても永眠されたとは思えない。

——Executive Hotel Officialとして、加藤敬三氏は、私たちの記憶の中でいつまでも生き続けていくのだろう。

(本誌・森下智美)